
砂上の楼閣

冬雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂上の楼閣

【著者名】

冬雪

【Zコード】

Z2272D

【あらすじ】

「世界の終わり、想像してみない?」彼女は言った。だから、ぼくは答えた。

「世界の終わり、想像してみない？」

砂上の楼閣を組み立てながら、彼女は言った。

「世界の終わり？」

「そう、世界の終わり」

唐突ではあるけれど、そんな彼女にすっかり慣れてしまつたぼくは、その真意を考える。

彼女の問には、いつも掴みどころがない。万人に万人の解答があるような、答える意味のないものばかりだ。

だから、これは疑問じやない。ぼくという人間を測るための、彼女なりの「ミニミニーション手段なんだ。そう気付いたのは、つい最近の話。

茜色に統一された空。浸食される生命の母。寄せでは返す彼女の鼓動を十回聴いてから、ぼくは答えた。

「終わらないよ。ぼくが死んだって、誰かが生きてる。地球が爆発したって、他の星には命がある」

「じゃあ、宇宙が滅んだら？」

彼女は、翻弄される城を懸命に支えながら、決してぼくを見ようとしない。外見で人を括りたくない、というのが彼女の信条の一つだった。

「うーん。そのときはきっと、代わりに何かが生まれるんじゃないかな」

始まつたものは、同時にいつか終わる宿命を帯びている。だけどさ。

そんな寂しい世界でも。始まりだけは終わらないって、そつまつんだ。

「……希望じゃなくて、予想を聞いたんだけど？」

果たして、彼女はぼくをすぐに見抜いた。でもその言葉に、非難

の色を見つけることは出来なかつた。なら、ぼくは彼女の要求を満たしたんだ、と思つ。

「同じだよ。ぼくにとつては、ね」

彼女の城は、もはやよくわからない凹凸のある塊と化して、いや帰して いた。

それは、終着点の用意されていないこの世界に投げ込まれた、ぼくらの暗喩じみていて。

ぼくは、田を逸らした。彼女は向き合ひに続けて いる。それが彼女の特異なんだ、と思つた。

「子供みたい」彼女は鼻を鳴らす。

「誰だつて誰かの子供だよ。神様以外はね。なら、キミはどうなのがいい？」

ぼくの切り返しに、彼女は作業の手を止めた。

「……世界はいつも終わつてゐる。長さに端があるみたいに、始まりには終わりが、生には死が確定してゐる。その観点から答えるなら、」

——世界は、もう終わつてゐる。

「……そつか

それが、彼女の答えたつた。

疑問の余地のない解答を祝福するように、残照が全てを血に染め上げる。そしてやがて終わりが来て、始まりが来て、終わりが来て、始まりが来て、終わりが来て、始まりが来て、終わりが来て、始まりが来て、終わりが来て、始まりが来る。……最後にどっちを添えるかだけは、譲れないなあ。

「……帰ろつか？」

彼女が身震いしたけれど、ぼくは気づかないフリをして提案する。

「……そうする」

彼女が立ち上ると同時に、砂上の楼閣は姿を消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2272d/>

砂上の楼閣

2011年10月3日17時53分発行